コブシメの種苗生産研究

伊野波盛仁

１９６７年から１９６８年までは種苗生産上必要な基礎的研究をおこなつてきた。その結果、天然卵の採取や稚仔飼育の方法と種苗生産上、解決を要する諸問題が明らかにされた。これらのことについてはその概要を１９６８年度事業報告で報告した。今年度は増養殖方法を検討するため、フ化飼育した稚仔を用いて、標識放流試験とテイラピヤ活魚を餌料とする養殖試験を計画した。しかし後者については給水ポンプの故障によつて種苗用のコブシメを失ない、そのため実施できなかつた。前者については現在も継続実施中であり、試験は完結していないが、これまでの概要を報告する。

コブシメの標識放流

自　的　　放流事業有効性の検討

コブシメは活きた餌料でなければ、あるいは少なくとも、動くものでなければ捕獲行動を示さない。このような摂餌の習性は養殖にさいしての難点である。

したがつてその幼期のみを飼育管理し、自然海面への放流をおこなうことによつてコブシメの増殖が期待できないだろうか。この意味から自然海面においての成長、生残率および回游範囲を明らかにするため、この試験をおこなつた。

方　法　　放流に用いたコブシメ

放流時の大きさは第１表に示した。すなわち背外套長：平均３１㎜、範囲２１～４５㎜であつた。これらのコブシメは１９６９年２月１６日石垣島名蔵湾で採集した産着卵を当場に移し、フ化飼育した。

第１表　放流コブシメの大きさ

背外套長（㎜）	尾数		
２０～２２	5	－5	－２５
２２～２４	4	－4	－１６
２４～２６	１９	－3	－５７
２６～２８	３５	－2	－７０
２８～３０	４７	－1	－４７
３０～３２	４７	0	0
３２～３４	３９	1	３９
３４～３６	４２	2	８４
３６～３８	１９	3	５７
３８～４０	6	4	２４
４０～４２	0	5	0.
４２～４４	0	6	0
４４～４６	1	7	7
	２６４尾		－4

$$M = \frac{-4}{264} \times 2 + 31 \fallingdotseq 31\text{㎜}$$

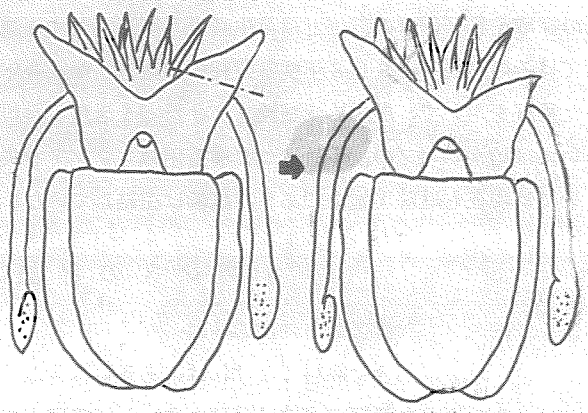
r＝２１～４５㎜

放流尾数：　６５０尾

標識の方法

甲イカ類ではこれまで標識放流はおこなわれたことがないようである。スルメイカの成魚については鰭につけるstrap型標識を用いている。[1] しかしながらこの標識はコブシメ幼魚には適当でないと考えられたので、今回は左第４腕切断の標識方法をとつた。下図に示したとおりである。この方法については１９６８年６月背外套長８cmの雄コブシメ１尾について右第４腕を鋏で切断してそのごの状況をみた。その結果は図に示したとおり、わずかに再生したのみで、１年後においてもいわゆる〃びつこ〃となり、標識として利用できることがわかつた。

切断部位とその後の再生状況



切断作業は放流２日前におこない、その後毎日１回、計３回1/10万モナフラシンによる薬浴をおこなつた。なお腕を切断された稚仔はその当日から活発に摂餌した。このことから左第４腕欠損による捕喰に与える障害はそれ程著しくはないことが推察された。

放流年月日と場所

放流年月日　：　１９６９年６月１０日

放流　場所　：　石垣島川平湾水道

情報回収の方法

放流の広告：　放流当日は新聞社漁業組合、地方庁、石垣市役所の関係職員および漁業者、コブシメ仲買業者およそ２０名立合いのもとに放流祈願をおこない、また標識放流の意義と目的を記したパンフレットを５０部配布し、標識放流の事実を衆知せしめるよう努力した。

放流の記事→八　重　山　毎　日　社

琉　球　新　報　社

沖　縄　タ　イ　ム　ス　社

標識コブシメの漁獲報告依頼

八重山毎日社に広告　２回

第１回目　　１９６９年１１月５日

第２回目　　１９７０年１月２０日→予定

現在（１９６９．１２．１）までの状況

まだ１度も確認されていない。しかしながらいわゆる〃びつこ〃コブシメについては４件捕獲の報告をうけた。これらのコブシメはいずれも腕の一部が欠損しているものであるが、左第４腕ではなかつた。

コブシメの腕の損傷は自然状態においても多いことが上記のことから推察される。したがつて腕